

中井正一における言語論への移行の問題Ⅱ

門部 昌志

Problème de la transition à l'étude sur langage chez Masakazu Nakai II

Masashi MOMBE

抄録/概要/要旨 カント第三批判序文前稿をめぐる論文の後、美学者中井正一は、言語に関わる論文に取り組んでいる。本稿では、中井正一がカント研究から言語論に移行した際、どのような研究を行ったのか、いかなる相違と連続性が見られるのかを確認する。また、言語論への移行の後、言語活動論や意味論を経て「委員会の論理」に至る過程、そして戦後における議論の展開をも確認する。

キーワード : 言語、言語活動、意味

1. はじめに

1927年、『哲学研究』の7月号に美学者中井正一は、「カント第三批判序文前稿について」を発表した。その二ヶ月後となる9月号で彼は「言語」の前半部分を(1と2)、1928年の4月号には「言語」の後半部分(3から6)を発表する。カント第三批判の研究から出発した中井がなぜ論文「言語」を書くにいたったのか。カントの研究から言語論にいたる推移の背景の一つとしては、カッシーラーの『シンボル形式の哲学(一)』第1巻、言語が中井の論文「言語」の脚注で言及されていることが注目される。

カントの研究の後、論文「言語」に向かうことで、どのような展望が開けてきたのか。またどのような点において共通する関心が見いだせるのか。論文「言語」の後半で中井は、ギリシャにおける哲学的問答法からヘーゲルの弁証法への展開を辿っている。カント第三批判序文前稿をめぐる研究においてもカントにおけるディアレクティッシュなる方法に言及していたことから弁証法への関心は部分的に共通しているといえる。もう一つの共通点は、思考の形成過程や起源への関心である。第三批判序文前稿をめぐる研究において中井は書簡を考慮してカントの思考の形成過程を論じた。そして「言語」では弁証法の形成過程ないし起源が辿られている。

中井における第三批判の研究と言語の研究は、どのような点で異なるのか。第三批判の研究においてはカントが、「言語」においてはライブニッツとヘーゲルが言及されている。カント研究から出発した中井は、「言語」において、一方でカント以前のライブニッツに遡り、他方で、カント以後のヘーゲルに興味を示しているのである。

中井におけるカント研究から言語研究への移行のみなら

ず、言語研究からその後の研究への移行をも考慮しなければならない。論文「言語」(1927-1928)の後、中井は、「発言形態と聴取形態並にその芸術的展望」(1929年)を記し、言語活動を論理に結びつけて論じるようになる。その後、「委員会の論理」(1936年)が書かれる。論文「言語」では、弁証法の歴史と並行して言葉の歴史が辿られた。「言語」における「言はれる言葉」、「書かれる言葉」、「印刷せる言葉」は、「委員会の論理」では、論理の歴史となって、「言はれる論理」、「書かれる論理」、「印刷される論理」として図式化される。

本稿の筆者は、幾度も中井の論文「言語」について述べてきた(門部、1999、2002、2004、2006、2008)。これまで筆者は、概ね、メディア論的思考との関連で論文「言語」を論じることが多かった。しかし、中井によるカント研究の後に「言語」が書かれたことを意識した時、この論文の位置づけは変化した(門部、2014)。また、「言語」におけるライブニッツへの言及の重要性に気がついた時、筆者における「言語」の読み方は変化した。

2. 言語の起源

論文「言語」の冒頭には、言語の起源についての記述がある(中井、1927b: 75)。中井はライブニッツの『人間知性新論』を参照しているが、該当部分は、ライブニッツがロックの『人間知性論』(仏語訳)から引用を行っている箇所にあたる。ここでは、ロックに遡行して確認してみたい。「いったい、神は人間を社会的な被造物であるように意図したもうである。そこで、神は人間を作るにあたって同類の人間たちと仲間になる傾性を与え、どうしても仲間になるようにしたもうたばかりでなく、社会のたいせつな道具で共通のきずなであるはずの言語[†]をも人間に備えたもうた」(ロ

ク、1997：79)。中井の要約によれば、神は人間を「社会的存在」として創った。共同生活への欲望と必然を人間に与えたばかりではなく、共通の紐帯となる「言葉の能力」をも人間に与えた。ロックのような人間の捉え方は、ライブニッツによれば、「人間が社会のために造られていることを認め」ず、「社会生活を強いられただけだ」と見なすホップズの見解から隔たっている（ライブニッツ、1995：12）。

言語の起源をめぐる考察に言及した後、中井は、幼児による「意味なき言葉」に注目する。幼児の「意味なき言葉」と意味を伝えようとする熱心さ、そして了解しようとする私たちの気持ち。これらの原型的な事柄は、既にほろんだ言葉、現在、語られている言葉、社会的な言葉、暗語などに関連し（中井、1927b：75）、それらの核心に肉薄するものである。

中井によれば、ヴントは初期の幼児には、「すべてのものを把握せんとする本能」があるとした。言葉は、距たったものを把握する本能である。この能力が「無限に遠きもの」の把握へと発展するとき、言葉は概念となるのではないか、と中井は問いかける（中井、1927b：76）。

言語の起源についての記述の後、言語についての研究が紹介される。中井によれば、言語の研究には、概念的意味の研究とそれと「交錯」¹²して成立する芸術的意味の研究がある。特に彼が注目するのは、言語音響に関する実験心理学的研究である。結果として、そこから引き出されるのは言語の感覚的意味である。従来、言語は単なる伝達器とされていたのに対して、それは単なる壺ではなく「酒でもあった」のである（中井、1927b：82）。

3 問答法と弁証法

1928年4月、中井は論文「言語」の後半部分を『哲学研究』で発表する。タイトルは同じとはいえ、その内容は「言語」の前半部分とは異なるものであった。「言語」の後半では、言語音響の実験心理学的研究はもはや言及されていない。「言語」の後半では、古代ギリシャから近代までの哲学的問答法から弁証法への展開が扱われていた。まず古代ギリシャを論じる際に中井はブチャー¹³の著作を参照する。

通常、私たちは、近代における印刷術の発明を大きな出来事と見なし、古代における書かれたものの発明の意義を忘却してしまう。しかし、中井は、書かれた言葉への移行を重視したブチャーの議論に注目する。ブチャーによれば、「話された言葉から書かれた言葉への移行は、書かれた言葉から印刷された頁への移行より、想像力にとってより驚くべきことであり、その帰結においてより革命的であった」¹⁴（Butcher, 2013:178-179=1940:158）。

知られるように、プラトンの著作には、書かれたものへの批判が含まれている。それはイデア論的な批判のみならず、

問答を重視する立場からの批判をも含んでいる。第一に、書かれた言葉は「生命をもち、魂をもった言葉」の「影」である（『パイドロス』276A）。第二に、書かれたものは、絵画のように、質問をしても答えない。「もし君がそこで言われている事柄について、何か教えてもらおうと思って質問すると、いつでもただひとつの同じ合図をするだけである。」（『パイドロス』275D）。哲学的問答法を重視する立場からすれば、返答しえない「書かれた言葉」は、批判の対象となりうるものと思われる。ブチャーによれば、「問と答の交換」や「会話による思想の交易」は、知識の素材に作用する心の働きにとって、不可欠のものであるとギリシャ人は考えた。

中井の議論は、ギリシャにおけるディアレクティクとレトリックの話題へと展開する。ディアレクティクは、少数の人々の間で行われる、問答形式によって思考を進行させる技術である。レトリックは、一般の人々を対象として行われる長い説話に関連する、「命題の説伏」に関する技術である。プラトンにおいては、ディアレクティクないし哲学的問答法は、「もろもろの学問の上に、いわば最後の仕上げとなる冠石のように置かれている」（『国家』534E）のに対して、レトリックないし弁論術は「政治術の一部門の影」であると見なされる（『ゴルギアス』463D）。これに対して、アリストテレスの場合、ディアレクティクとレトリックの対立は、「二対の合唱隊のその様に相対者と成った」（中井、1928：63）。

中井によれば、問答は、「二つの心の間に於ける思惟の交易」であるのに対して、説話は、「一つの心の自己生産」ないし「自己消費」と考えられる。話されたソクラテスの言葉を書き取ったプラトンの著作は、言葉を借りながらなされる自問自答であり「自己反芻」の痕跡ではないか。中井は、ここに、他人に語られる「外なる言葉」と自己に向かって語る「内なる言葉」の対立を見出している。そしてアリストテレスにおいては、両者は「二つの合唱者」となり、内なる言葉と外なる言葉の融合が見られる（中井、1928：65）。

中井は、一方で、弁証法の根源を、ソクラテス、プラトン、アリストテレスに見出し、中世や近代までの流れを辿っている。他方で彼は、言葉の歴史に注目し、「言はれる言葉」、「書かれる言葉」、「印刷せる言葉」にいたる推移を背景として重視する。「問と答の交換」、「会話による思想交易」としてのディアレクティケーが汎論理主義のディアレクティクとなったことは、「外なる言葉」が「内なる言葉」へと「転生」したと見なされる（中井、1928：69-70）。

論文「言語」の後半の前半部分はギリシャにおける哲学的問答法について書かれていた。「言語」後半の後半部分は、ロマン派とヘーゲルについて書かれている。ロマン派が言及されるのはヘーゲルとの関係に加えて、彼らにおいて言語の研究が隆盛したからである。中井によれば、一方では喪失された言葉、知られざる地の言葉への愛惜などの「逃避」が言語研究の背景となっている。他方では、固まった哲学へ

の「反逆」など「争闘」が背景にある。

中井によれば、シュレーゲルにとって「外なる言葉とは…
…弁舌であり、内なる言葉とは思惟である」（中井、1928：
74）。彼においては近世のディアレクティクとソクラテスの
イロニーの接合が目指される。それらは内なる言葉と外なる
言葉と見なされる。

論文「言語」において、ロマン派についての記述の後、
ヘーゲルの伝記的紹介や理論的議論が行われる。とりわけ
後者の中で、「中間者」という言葉が用いられているのが注
目される。中井の解釈によれば、ヘーゲルにおいては悟性と
理性が分けられる¹⁵。理性論理は悟性論理ないし反省的論
理の上にあるものと位置づけられる。悟性論理ないし反省
的論理は「未完のもの」であり、理性によって指導されるべ
きものである。反省ないし悟性作用は「一般的抽象化」のこ
とであり、「感覚的統覚と思惟的理性作用の中間者」である。
それは「絶対的否定としての創造力」となり、「この否定の
矛盾性」はあらゆる「動き」と「生の根源」になる。

ヘーゲルを論じた後、中井はライプニッツに言及する。物
質から神に至る「表象の段階」、暗い表象から明るい表象に
至る形而上学的連続体系が「表出」に対応する。意識の加
わった「反省的表現」では、暗い表象と明るい表象が「事実
真理」と「永遠真理」の「認識論的対立」の背景となって意
識における思惟の契機となる。

しかし、「モノドロギーはモノドであり得ない」（ク
ーノー・フィッシャー）と中井はライプニッツを批判する。連
続態の形而上学から二元的認識論への繋がり、ライプ
ニッツにおける「残された課題」であると中井は指摘し、そ
の後、独自の議論を展開する。

中井によれば、「モノドとしての自我」が自我の自覚に立
脚するにはモノドの「核は破られ」、「深き没入」が必要とな
る。モノドの内面への「潜入」によって「自己脱離」ともい
うべき「否定的二元的力」が働く。より暗いものに向かって、
あるいは、「より高きものに向かって」「今の立場を捨脱す
る」点において「真の力」がある。

「非合理的自我の創造力が他の浪漫家の目標と成った様
にヘーゲルはこの『中間者』としての否定的根源的力として
それを把握したのではあるまいか。そしてライプニッツで
課題として残されたものを解かんと試みたのではある
まいか」（中井、1928：81）。

そして議論は再びヘーゲルに戻る。ただし、論点はエ
ピソードを通じて語られる。1827年10月18日にゲーテがヘ
ーゲルを招待した時、会話の主題は「弁証法の本質」とな
った。その際、ヘーゲルは、それが「訓練された反抗的精神」
であると述べたという。ただし、この言葉を中井は次のように換
言している。「自ら自らの足下をも省み、揺ぎ滑り、脱けて
行く底のもの」である、と（中井、1928：83-84）。先に述べ
た「自己脱離」や「捨脱」を思わせる言葉であることに加え
て、自己関係の否定性と繋がりうる言葉であると思われる。

これで論文「言語」の前半と後半を概観してきたことにな
る。前半では「言語」の研究が前景に現れていたのに対して、
「言語」の後半では、ロマン主義における言語の研究などが
一部で論じられているものの、基本的には、弁証法の起源と
展開を前景として、その後景で言葉の歴史が辿られていた。
問答をその始原的な形式とするディアレクティクから汎論
理主義の形式をとる現在の意味でのディアレクティクへの
移行の過程は、「言はれたる言葉」より「書かれたる言葉」、
そして「印刷されたる言葉」への移行の過程に類似してい
る。これが「言語」における主要な論点の一つである。論文
「言語」は、全編を通じて文字通り言語が論じられていると
いうよりも、言語論を逸脱する側面がある。中井におけるカ
ント論から言語論への移行の問題を考える際、同時に言語
論からの逸脱をも考えるべきなのかもしれない。カント研
究の後、中井は「言語」の前半部分で言語研究を論じたが、
その後、彼の主たる関心は前景としての弁証法と後景とし
ての言葉の歴史へと向けられたからである。また、カント研
究の後、中井の関心は、カント以前のライプニッツとカント
以後のヘーゲルの比較にも向けられたことが「言語」の読解
によって確認される。言語論への移行は、カントからの距離
を伴っていた。

もちろん、中井において、カント研究から言語論への移行
における連続性はある。第一に、「言語」に見られる弁証法
への関心はカント研究の時点においても僅かに確認される
ものである。第二に、用いられる文脈は異なるとはいえ、「中
間者」という用語の利用も共通するものである。

4 「言語」以後の言語活動論と意味論

論文「言語」の後、中井は、「発言型態と聴取型態並にそ
の芸術的展望」（1929）などの論考のなかで、言語活動と論
理的判断を関連づけて論じている。言語論への移行の後、弁
証法と言葉の歴史を論じた中井は、判断論に導入された言
語活動論に移行する。

中井によれば、ライナッハは判断を「確信」と「主張」に
分けて考えた。それは、自己に語る内なる言葉と他者に語る
外なる言葉という対比において判断を考えることである。

この確信と主張の対比によって「是認」が二つに分かれた
る。「確信」においては「判断的是認」がある。判断的是認
の是認である「同意的是認」は「主張」における是認である。
また、主張は、「単純なる主張」と論争を目指す主張にわけ
られる。

さらに、中井は、ライナッハにおける確信が二つに分けら
れると考える。一つには、主張する「発言者の出発点として
の確信」があり、もう一つには「聴取者の帰着点としての確
信」がある。これによって、中井は、内なる言葉と外なる言
葉という対比に加えて、「能動的な発言の型態」と「受動的

な聴取の型態」という対比を強調する。そしてこの対比から無関心性の問題を論じることとなる。

判断がなされていない時の「絶対的無関心」、肯定と否定が保留されている時に現れる「批評的無関心」などの問題に発言と聴取の軸を中井は重ね合わせる。これによって、他者に対する発言の際に現れる無関心のみならず、自己の主張を聞く自分自身のなかで現れる無関心性があるとされる。この考え方は、内なる聴取者を認めるものである。これにより、ライナッハによって提唱された、当初の主張と確信という区別は弱体化されることになる。

ここで内容を紹介した「発言型態と聴取型態並にその芸術的展望」(1929)は、「委員会の論理」(1936)との関連で重要な論考である。主張と確信、無関心性の問題など「委員会の論理」の中篇の原型的な議論が見られるからである。そればかりではない。「発言型態と聴取型態並にその芸術的展望」には、論文「言語」の長い要約が含まれている。「会話による思想交易」としてのディアレクティケーがロマン主義のディアレクティクとなるには、「二千年の時」と「言はれる言葉」より「書かれる言葉」、そして「印刷せる言葉」への推移などが背景にある。『外なる言葉』としてのディアレクティクの、『内なる言葉』としてのディアレクティクへの転生と云ふ興味深い現象』についての記述が挿入されているのである。この箇所は、「委員会の論理」上篇の原型的な議論であるといえる。したがって、「発言型態と聴取型態並にその芸術的展望」は「委員会の論理」の上篇と中篇の原型的な議論を含み、また、両者の接点を示していることになる。

もともと、原型的な議論といっても「委員会の論理」においては弁証法の変化に対する関心はやや希薄である。むしろ論理の歴史と言葉の歴史へのより一般化された関心が「委員会の論理」には見られる。「言はれる論理」は(説服と)弁証の論理である。「書かれる論理」は瞑想(と思弁)の論理である。「印刷される論理」は経験、行動、機能、生産の論理である。

言語論及び言語活動論を探求するなかで、中井は、内なる言葉と外なる言葉、確信と主張、発言と聴取などの対比を練り上げてきた。意味論的探求の試みである「意味の拡張方向並にその悲劇性」(1930)では、それらに意味の「充足的方向」と「拡張的方向」という対比が加わる。意味の質的に深化する過程が意味の充足であり、意味の量的に展開する過程が意味の拡張である。この時、意味充足の能力に応じて、友のように同等である場合、親子のように相違がある場合、輿論のように、いずれでもありうる場合にわけられる。また、言語構成上の三つの疎隔が考えられる。第一は『自分』への疎隔であり、思うことを言えない、言っていることを思えないことである。第二は『他人』への疎隔である。友や親や輿論に対して、「自らは決してさながらに受取られる事はない」。第三は、「領域相互の疎隔」である。友との関

係、「親との関係」を同時に愛すことのできない場合である。

5 「委員会の論理」

論文「言語」(1927-1928)を始め、「発言型態と聴取型態並にその芸術的展望」(1929)、「意味の拡張方向並にその悲劇性」(1930)などの論考の論点を辿ってきた。ここで、1930年代半ばの時点における総合の試みである「委員会の論理」との関連から初期中井における言語論、言語活動論、意味論について論じておきたい。

論文「言語」においては、弁証法の歴史の背景として「言はれる言葉」、「書かれる言葉」、「印刷せる言葉」という言葉の歴史が注目されていた。「委員会の論理」(1936)では、用語法が変わり、「言はれる論理」、「書かれる論理」、「印刷される論理」となった点については述べた通りである。しかし、論文「言語」と「委員会の論理」の間には、意味の拡張方向についての研究があることを忘却すべきではない。「委員会の論理」上篇では、用語法の変化のみならず、意味論的な観点が付加されている。中井によれば、言うことの場合は、様々な「解釈」が可能であり、「対立的な論争」が生じうる。これに対して「羊皮紙に書くこと」においては、「一義的な意味志向」が求められる。つまり「一つの言葉」は「一つの意味を志向する」。これに対して「印刷される論理」では、公衆の「生活経験」と「周囲の情勢」によって解釈する自由の余地が生じる。これらの議論は、メディア史的にみて必ずしも妥当ではないかもしれない⁶。しかし、ここで確認したいのは、「委員会の論理」上篇では意味論的な視点を加味して論理の歴史が語られていたということである。論文「言語」と「委員会の論理」の間に、意味の拡張に関する研究がなされていたことの帰結であろう。

述べたように、「委員会の論理」(1936)中篇では、「発言型態と聴取型態並にその芸術的展望」(1929)で展開された主張と確信の問題が再び取り上げられている。その際、「意味の拡張方向並にその悲劇性」(1930)で取り上げられた虚言の問題や拡張の問題と主張と確信の問題を絡めて新たな議論も展開されている。ここでは拡張の問題に注目したい。

述べたように、確信は判断的是認であり、主張は判断的是認の是認である。判断的是認の是認としての主張では、意味の「量的転化」が生じている。主張は、他の人々に対して「一つの判断的是認の量的な拡張を要求してゐる」。「判断的是認は意味の質的構成であるとすれば、同意的是認は意味の量的構成への転化である」(中井、1936b: 19)。ここで中井は、「意味の質的方向」と「意味の量的方向」という「転化の軸」があるとし、そうした観点から主張と確信を論じているのである。

中井はまた、これらの議論を用いて審査や答案、投票といった具体例を論じている。答案は、一つの「判断的肯定」であるとすれば、審査とは一人ないし数人における「同意的

肯定」である。この段階では、同意的肯定の意味は量に転化しており、点数へと換算されている。投票の事例においては、ある確信が主張される場合、それに対する「同意的肯定の量的換算」がなされるのである。

これらの議論では主張と確信の対立が前提となっているが、「委員会の論理」では、否定判断論によって、主張と確信の連続性が論じられている。中井によれば、ヴィンデルバンドとリッケルトにおいて、否定判断とは、「一つの問の評価的回答」である。例えば、「この薔薇は赤くない」という判断の場合、「この薔薇は赤くないだろうか」という問いが生み出され、後に評価され否定される、と考えるのである。つまりこれは「二次的な回答の評価」である。この回答的评价に注目すれば、確信ないし思惟における判断であっても、討論との連続性があるということになる。

中井において、初期の言語論、言語活動論、意味論は、「委員会の論理」の前提となった。言語論、言語活動論、意味論のエッセンスが「委員会の論理」に注ぎ込まれたのみならず、その延長線上で新たな議論も展開された。しかし、言語論、言語活動論、意味論が「委員会の論理」のすべてを覆い尽くすわけではない。「委員会の論理」中篇後半で展開される機能論や技術論、生産論などは、言語論、言語活動論、意味論の限界を超えるために必要な異系統の議論である。また、「委員会の論理」下篇では集団的討議をめぐる議論が新たに展開されている。そこでは集団的言語活動の過程が論じられている。提案、決議、委任、実行、そして報告と批判をへて再び提案に回帰する過程が実践の論理である。

6 行為と世界像

「委員会の論理」(1936年)との関連で、初期の言語論、言語活動論、意味論について論じてきた。「委員会の論理」から約10年後、「感嘆詞のある思想」(1945年)のなかで中井は、かつて「言語」(1927-1928年)で論じたライプニッツの問題を再度取り上げている。それは「モノドロギーはモノドではありえない」というクノー・フィッシャーの言葉に関する議論である。中井によれば、モノドロギーは、物質より神に至る表象の段階である。「このモノドロギーがもし、その一連続体系中の一モノドとしてのライプニッツの一意意識表象であるとしたならば、窓のないモノドとして、他の全モノドの全構成を支える構造自体ではありえない」(中井、1981:145)。しかし、モノドロギーはライプニッツによって構成されたものである以上、モノドロギーはモノドではないという指摘は、痛烈な批判となる。ライプニッツが神でない以上、「一モノドの意識主観であっては、全モノドの構造を背負いきれなかったのである」(中井、1981:147)。

中井は、問題を次のように言い換えている。それは、ある世界像を構成する場合、自己の現在の「現実行為」を「生の生成行為のまま」組み込むことができるかどうか、という問

題である。

このように考える時、ライプニッツとは違うものが現れる。世界像を構成する際、完結した「一連続体」を想定するのではなく、矛盾を含めて世界像を構成するのである。矛盾を前提としているため、矛盾があっても、それは「不死身の体系」となっている。

しかし、「感嘆詞のある思想」(1945年)において、中井は、このような西方哲学に限界を感じ取るようになっていた。矛盾の概念ではなく、可能と不可能の間を往来する際の喘ぎやその表れとしての感嘆詞に彼は注目する。

7 「言語は生きてゐる」

1950年、『中央公論』の12月号で中井は、「言語は生きてゐる」を発表している。中井の言語論、言語活動論、意味論などは初期に集中していることを考えれば興味深い例外の一つである。これは『中井正一全集』には未収録の文章である。言語が「生きてゐる」というのは、言葉が変化するという意味である。同じ言葉でも、十年もたてば、「他の意味に取り違へてしまふ」。このような言葉の変化する様子から標題「言語は生きてゐる」が説明される。意味の変化する言葉の例としては **subject** と「気」等が扱われ、「た」、「は」、「よ」なども言及される。「言語は生きてゐる」には、中井自身による先行する研究がある。「**Subjekt**の問題」(1935年)と「気(け、き)の日本語としての変遷」(1947年)である。

subject、**subjekt**、**sujeet** は、明治以降「主観」として翻訳されてきたが、昭和7、8年頃より **subject** は「主体」として翻訳されるようになった。もっとも、この言葉の原語を辿ると、さらなる読み違えの過程が明らかになってくる。語源は、ギリシャ語のヒュポケイメノンである。プラトンでは、「下に置かれている」といった意味で用いられており、まだ哲学的な意味を獲得してはいなかった。アリストテレスになると「変化多い現象の根底に、不変なるものとして横たはるもの」といった意味で用いられた(中井、1950:126)。カントは「世界の観察者としての **Subjekt**」ないし「主観」を打ち立てた。そしてヘーゲルは、自己が「分裂しながら発展するもの」として **Subjekt** を読み替えた。

中井は、言葉の歴史を辿りつつ **Subjekt** の変化を探るという問題関心を持っていた。そして彼は日本の文化において対応する作業を行えないかと考える。そして自己意識の自覚を確認するための言葉として「気」という言葉に辿り着くのである。

中井によれば、室町時代の秋月物語のなかで「気をつかふ」という言葉が用いられていた。そこには明確に「個人の意識を反省」している用例が見出される。そして近松門左衛門の語彙になると、「気遣」の用例が271になるとい

う。

かつて中井は、「言はれる言葉」、「書かれる言葉」、「印刷せる言葉」など、言葉の歴史を論じた。「言語は生きてゐる」は、意味論的な視点から言葉の意味の歴史を論じたものと思われる。この論考では、言葉の意味の変化ないし読み違えの歴史が事例とともに辿られる。それは意味の拡張作用に着目した言葉の歴史と言えるかもしれない。

文 献

- 中井正一 (1927a)「カント第三批判序文前稿について」『哲学研究』136号。
- (1927b)「言語」(一～二)『哲学研究』138号。
- (1928)「言語」(三～六)『哲学研究』145号。
- (1929)「発言型態と聴取型態並にその芸術的展望」『哲学研究』155号。
- (1930)「意味の拡張方向並にその悲劇性」『哲学研究』167号。
- (1935)「Subjektの問題」『思想』160号。
- (1936 a)「委員会の論理(上)」『世界文化』一月号。
- (1936 b)「委員会の論理(中)」『世界文化』二月号。
- (1936 c)「委員会の論理(下)」『世界文化』三月号。
- (1950)「言語は生きてゐる」『中央公論』12月号。
- (1981)『中井正一全集1 哲学と美学の接点』美術出版社。
- (1995)長田弘編『中井正一評論集』岩波書店。
- Havelock, E. A., *Preface To Plato*, The Belknap Press of Harvard University Press, 1963.
- 馬場俊明 (2009)『中井正一伝説』ポット出版。
- Butcher, S.H.(2013) [1916] *Some Aspects of The Greek Genius*, Hardpress (=1940年、ブチャー『ギリシャ精神の様相』田中秀央、和辻哲郎、壽岳文章訳、岩波書店)
- プラトン (1993 a)『パイドロス』藤沢令夫訳、岩波書店。
- (1993 b)『国家(下)』藤沢令夫訳、岩波書店。
- (1994)『ゴルギアス』加来彰俊訳、岩波書店。
- マクルーハン (1992)『グーテンベルクの銀河系』森常治訳、みすず書房。
- 門部昌志 (1999)「技術と媒介の社会学」、『年報人間科学』第20号、pp.391-410。
- (2002)「中井正一再考—集団的思惟の機構について—」、『県立長崎シーボルト大学国際情報学部紀要』第3号、pp. 137-146。
- (2004)「中井正一における集団的コミュニケーションの観念」、『県立長崎シーボルト大学国際情報学部紀要』第5号、pp.105-116。

———— (2006)「集団／身体／言語活動」、『県立長崎シーボルト大学国際情報学部紀要』第7号、pp.131-144。

———— (2008)「中井正一の言語活動論をいかに読むか」、『長崎県立大学国際情報学部研究紀要』第9号、pp.115-128。

———— (2014)「中井正一における言語論への移行の問題 I—中間者をめぐって—」『長崎県立大学国際情報学部研究紀要』第15号、pp.69-84。

ライプニッツ、ゴットフリート・ヴィルヘルム (1995)『ライプニッツ著作集5 認識論『人間知性新論』下』谷川多佳子、福島清紀、岡部英男訳、工作舎。

———— (2005)『モノドロジー 形而上学叙説』清水富雄、竹田篤司、飯塚勝久訳、中央公論新社。

ロック、ジョン (1997)『人間知性論(三)』大槻春彦訳、岩波書店。

注

- †1 ライプニッツ (1995) では、「話す能力」となっている(仏語への翻訳者ピエール・コストによる変更のため)。ライプニッツによる著作の英訳を参照した中井は「言葉の能力」と記している。
- †2 中井 (1927b : 78) では、「交索」という語が用いられているのに対して、『中井正一全集1』では、「交錯」という語が用いられている(中井、1981 : 212)。
- †3 ブチャーはスペンサーの議論を応用している。生物学的な生命の定義とは、「外的関係に対する内的関係の不断の調整」(ハーバート・スペンサー)である。ブチャーは、この議論を用いて書かれた言葉を論じる。「書かれた言葉は環境の変化に対して自ら調整しまた適応するといふことがない……話された言葉でも、一度型にはまると、同じように不動である」(Butcher, 2013:191-192=1940:167-168)
- †4 邦訳と中井の論文を参照の上、訳文は適宜、変えてある。
- †5 ヘーゲルの『論理学』には、悟性と理性の区別を批判した箇所もある。本稿では、中井の解釈を重視した。
- †6 「口語文化型の人間にとって字義とはあらゆる可能な意味のレヴェルを包括するものであった。たとえばアキナスは文字のなかにそれらを読みとった」(マクルーハン、1992 : 172)。